

# 地域資源を活かした観光まちづくりの成功要因に関する比較研究

## ——ときがわ町と小川町を事例に——

深刻な人口の減少と超高齢化社会は、日本の地方地域において重大な問題である。若年層を中心とした都市部への人口流出により、地域経済の縮小や空き家の増加、伝統文化の衰退など様々な社会的・経済的問題が顕在化している。このような状況を打開する術として、地域資源を活用した観光による地域活性化を図る〈観光まちづくり〉が注目を集めている。本研究では、ときがわ町と小川町の観光まちづくりについて分析した。この2つの町は人口や東京からの距離などよく似た環境だが、ときがわ町は観光町づくりに成功している。そこで、ときがわ町と小川町における観光まちづくりの取り組みは、どのような要因によって成果に差が生じているのか、という問いを立てた。それに対して、地域資源そのものの質よりも、資源をどう物語化し、どう体験コンテンツに変換するかが成功の秘訣だという仮説を証明した。

第1章では、観光まちづくりの起源と定義を明らかにした。存続困難に直面した地域住民の動きが起源となっていることがわかった。また、地域主体の一体的な取り組みによる地域の活性化と、それに伴う生活の向上を目的とするものが定義であることが明らかになった。第2章では、ときがわ町と小川町の概要や観光戦略について述べた。ときがわ町は、清流などのあるがままの地域資源を活かすことに特化し、小川町は和紙や酒造、有機農業をはじめとする里山文化に力を入れていた。第3章では、他4つの地域との人口に対する観光入込客数の比較をもとに物語性の根拠について分析し、ときがわ町の観光まちづくりが成功していることがわかった。

本研究を通じて明らかになったのは、観光まちづくりの秘訣とは、①地域資源の物語性を最大限活かすこと、②地域住民・行政・民間が協働し地域引力を高めること、③地域に関わる多様な人々を巻き込むこと、の3点が不可欠であるということである。